

学校設定科目

本校はSSHの指定高校でもあり、高校1年次において「SSH探求科学」・「SGH課題探求型学習」のいずれかを選択履修することとしている。時間数は2単位とし連続授業としている。SGH課題探求型学習は、「探求基礎（高校1年）」「探求応用（高校2年）」「探求発展（高校3年）」としている。

探求研究として取り扱うテーマは、社会、経済、文化などグローバル化が急速に進展し、国際的な流動性が高まっている現在、科学技術の急速な進歩と社会の高度化、複雑化や急速な変化に伴い、過去に蓄積された知識や技術のみでは対処できない新たな諸課題が生じており、それらに対応していくため、新たな知識や専門的能力を持った人材が求められていることから、21世紀の社会状況を展望し、国際社会でリーダーとなるべく人材育成のプログラムを開発としている。グループワークを多く取り入れた研究の進め方とした。

【グループワークの進め方は次のように定めた】

	目安時間	教員の役割
・ディベートの班ごとにグループ ・各班で、司会・記録・リーダーを決定	5分	リーダー力の観察
・個人のワークシート策定 ・個人のワークシート発表 ・質疑 ・グループワークシート策定	50分	個々の相違点に注意を払う
・グループでポスター策定	30分	
・振り返り	10分	

成果と課題の分析検証

(1) 生徒の変容調査

SGH事業の成果を分析するため、入学直後と3年後の質問調査を実施した。特筆すべき点として、

- ①受身ではなく主体的に学習することについて
指定前肯定率：45.5%→指定後：55.0%
- ②課題解決に向けた有益な考え方について
指定前肯定率：32.1%→指定後：42.5%
- ③社会課題に興味・関心が沸いたか
指定前肯定率：67.1%→指定後：83.4%
など、生徒の意識が向上することとなった。

(2) 身近な地域に関する調査

- ①身近な地域の課題を積極的に考えるようになった
指定前肯定率：52.4%→指定後：76.5%
他調査も受講後の意識は高まった結果となった。

(3) 海外への意識と行動の変化

最も大きな変化をもたらしたものは海外への意識・行動であった。

指定前留学（海外研修含）率：10.1%→指定後：30.8%となり、大幅な伸び率であった。また、その多くが国際会議、インターンシップなどへの参加となり、自主的な活動を求める結果となった。

(4) 教員の意識変容調査

教員、学校の取り組みについて、SGH事業の開始前、開始後について調査した。結果は指定後の変化が大きく、成果として認識することができる結果であった。

- ①学校の取り組みが向上した
指定前肯定率：32.5%→指定後：78.0%
- ②グローバル人材育成につながった
指定前肯定率：46.8%→指定後：63.7%

教科との連携・探求活動

SGH課題探求型学習の主たるチームは、地歴・公民、英語、国語の各科が中心となって研究を行なった。探求型学習については、各教科が連携して研究開発を行なうこととしており、年2回近隣の中学・高校・大学と合同の研究会を実施した。事例として中学生対象（本校の中学部）で、「社会科・理科・国語科・英語科」が連動した「社会研究授業」の研究を実施し、現在は定着した科目として継続している。それらの研究結果をベースとして、2019年度からiPadを取り入れた、探求型授業の研究を開始した。

地域との連携

北海道の産業、経済など地域に密着したテーマを使った課題研究を行なった結果、道庁・ニセコ町などの行政機関と連携した街づくりの国際会議開催や地域活性への参加を行なえるようになった。北方領土問題では「ビザなし交流」に教員・生徒が参加し、元島民へのインタビューなどを通じて問題意識を学んだ。外交関係の難しさや領土問題の解決の難しさを学んだ。